



RI 第 2 6 1 0 地区

井波庄川ロータリークラブ会報

2011-2012 年度 No. 1 2

事務局 〒939-1635 富山県南砺市福光 7336-4 福光会館 3F
ふくみつ光房内 TEL 0763-53-1333 F A X 0763-53-1334、

inashor@athena.ocn.ne.jp

2011-2012 年度 会長 高瀬顕正、幹事 浅田裕二

2011-2012 年度 RI テーマ



「こころの中を見つめよう
博愛を広げるために」
(カルヤン・パネルジー会長)

例 会 記 録

第 1 5 9 0 回例会

平成 2 3 年 9 月 2 8 日(水)

井波文化センターエイトホール

1. 点 鐘 高瀬顕正会長
2. ソング 「それこそ、ロータリー」
3. ゲスト卓話者紹介：石岡昌英氏（紹介者：小西会員）
4. ビジター：松村寿君、松本敏博君（南砺 R C）



5. **会長の時間**：2 時から福光で法話をするため、職業の衣装で失礼します。松村さん、石岡さんようこそ。石岡さんのお父さんとは、昔職場が一緒でした。

さて、この前の日曜日は地区の敬老会がありました。来賓の挨拶の中で、南砺市には長寿と言われる 100 歳の方が 50 人おられるそうで、20 年前には 1 人しかいなくて、この 20 年で 50 倍になりました。戦後初めての国政調査（昭和 25 年）では、100 歳以上が全国で 97 人（85 万人に 1 人）で、平均寿命が 50 歳代の時です。昨年の調査では、45000 人（2500 人に 1 人）ということです。農林省の昭和 7 年の調査で、当

時は医者に掛かると収入の半分が必要だったそうで、田舎の人は、医者を呼ぶのは死んだときに診断書を書くためだけだったそうです。国民の寿命が延びたために長寿の人が増え、高齢社会となりました。これも国民健康保険が出来たおかげです。これが、国民皆保険となったのは、意外に歴史が新しく昭和 39 年（東京五輪の年）です。1 割とか 3 割負担で済むので大変助かります。先ごろ、P E T 診断センターへ行きましたが、これは全額負担で健診のため保険がきかず、79500 円かかりましたが、もしガンなどで保険で検査するなら、10000 円ほどで受けられます。現在県内には、100 歳以上が 579 名で、男性が 79 名、女性が 500 名だそうで、男性の最高齢者は砺波市在住で 104 歳、女性は富山市で 109 歳だそうです。私が月忌参りに行っているお宅でも 100 歳以上のおばあさんがおられます。大変お元気で後 5-6 年は心配なさそうです。ところで、長寿の呼び名は、60 歳が還暦、70 歳が古希、77 歳が喜寿、80 歳は傘寿、88 歳は米寿、90 歳が傘寿で、99 歳は白寿、100 歳は百寿、108 歳は茶寿、111 歳は皇寿、120 歳が大還暦と、全部で 11 もあります。世界の歴史で大還暦は 2 名で、ギネスの記録で、120 歳男性は日本人で、鹿児島県徳之島の泉重千代さん、122 歳女性はフランス人のジャンヌさんだそうです。長生きのコツは、タバコは 10 人中 9 人が吸わない、お酒は 10 人中 8 人が飲む（ただし 1 合程度）、ウォーキングは 70-80 歳までは毎日していた、

ということですので、皆さんも心がけて下さい。

6. 幹事報告：①10月のロータリーレートは、1\$=78円です。②2012年国際ロータリー年次大会は、バンコクで、5月6日～9日開催されます。③本日理事会なし。来週開催。④10月12日の例会は三楽園で開催されます。
7. 委員会報告：①親睦委員会（荒木委員長）：「秋の親睦旅行」は、「九頭竜紅葉と池田町そばうち」コースで、福井県池田町の能面美術館を見て、ふれあい道場でそば打ちともちつき体験をし、九頭竜湖で紅葉をみえます。なお、10月26日を27日（木）に変更します。④出席委員会：本日20名中15名出席（調整後75.00%）
8. ニコニコBOX（本日5名、6000円。9月計26000円、年度累計116000円）

高瀬会長：爽やかな季節となりました。早退失礼。

小西会員：石岡さんようこそ。卓話を引き受けて頂き感謝。

坂井会員：欠席ばかりで申し訳ありません。10月12日卓話当番です。宜しくお願いします。

荒木会員：台風で多くの被災者があり、早く復興されますよう期待します。

山本会員：石岡さんようこそ。早速娘から本を取り寄せます。

卓話『「石岡昌英」から「石岡ショウエイ」を経由して「石岡琉衣」に至るまで』

石岡昌英氏

小西会員（紹介者）：小説家 石岡琉衣さん（本名 石まさひで岡昌英さん）を紹介します。



デビュー作「白馬に乗られた王子様」が今年、いきなり才能ある新人作家を発掘するために設けられた文学賞「第12回ボイルドエッグ新人賞」を受賞されました。【参考（山本註）：ちなみに、第4回受賞作は「鴨川ホルモー」で、その後TV化・映画化のベストセラー「鹿男あおによし」「プリンセス・トヨトミ」の、今はときめく万城目学（まきめ まなぶ）です。】

目下、各書店で売行き絶好調であり、只今2作目を執筆中とか、今後大いに期待されるようです。

石岡さんは現在、高瀬神社の大鳥居の横のあづま建ちの実家で創作活動されておられまして、お父さんは南砺市教育委員長であり、又、彼は私の長男と同級生であります。名古屋大学法学部を卒業後、北日本放送で放送記者とディレクターを経て11年前、漫画家に転身、当時東京で石岡ショウエイとして「少年ジャンプ」の表紙を飾る代表連載作「ベルモンド、リ、ビジター」等の作品を数々制作されていました。

ところが、突然、脳の血流障害という難病にかかれ、止む無く今は自宅で静養されながら、小説家 石岡琉衣さんとして執筆活動されております。

今日は、私の無理な卓話の願いを快く引き受けて頂き、来てもらいました。御静聴の程をお願いいたします。



石岡昌英氏：『「石岡昌英」から「石岡ショウエイ」を経由して「石岡琉衣」に至るまで』

【紫字：ご本人より頂いた抄録文】卓話での挿入部分は黒字で記載（中島・山本）

・はじめに

自分の人生のすべてを、もの作りに捧げる気持ちで生きています。もともとそれほどまでの気概はなかったのですが、結果的にそういう流れとなってしまいました。人生とは先の見えないものだな、と痛感しています。今は自分で

きることはなんだろう、と日々悩み、自分の身体と相談しながら、できることをできる範囲やっています。

多少の、いや、おおいに無理をしないと生きていけない厳しい世界なので続けていけるのかに不安はかなりありますが、これしかできることはない、という状況にあるので、精一杯のことをやっています。

(卓話にて) 四年前に脳の病気を患ってしまい、日常生活にも支障が出るようになり、現在は家族に支えられながら生きています。ただ、この歳で両親に甘えて生活するのは耐えがたいものがあつたので、なんとか仕事らしいものができないかと考えました。その結果、それまでの漫画家という仕事はできなくなりましたが、小説家という道を模索しています。

・石岡昌英として

大学を卒業し、社会人としての最初のステップは、放送局での報道記者、およびテレビディレクターでした。もの作りがしたいという気持ちと、サラリーマンとしての安定収入、両者のバランスが取れた現実的な選択でした。

ですが仕事をする中で、もっと手作りの仕事がしたい、という気持ちが抑えきれなくなり、二年と少しで辞表を提出しました。安定収入はどうでもいい、人生は勝負だ、などという気持ちの昂ぶり、無謀さがありました。

(卓話にて) なにをしようかと考える中で、日本の若者文化が世界で注目されていることを知り新鮮味を感じました。もともと「菊と刀」や「わびさび」の概念が欧米にうけていることは知っていましたが、当時はそれらとはまったく別、サブカルチャーといわれる分野の日本文化の普及が海外で急成長している時期でした。サブカルチャーとは、主に、アニメ、漫画、ゲームです。

このうち、漫画についてあらためて考えた時に、自分にもできるかもしれない、間に合うかもしれない、と思ってしまいました。間に合う、というのはどういうことかという、井波彫刻や絵画などの芸術的な創作は、下積みをして順番にステップを踏んで、と評価を得られるまでに時間がかかりますが、漫画だとすぐに結果が分かる、ということです。面白い面白くないか、という視点は芸術のよしあしに比べれば判断ししやすいものなので。

・石岡ショウエイとして

選んだ分野は、漫画でした。物語を作り、絵を描く。子

供の頃から漫画は読んでいたし、落書き程度に絵を描くことは好きだったので、なんとかなるんじゃないか、と思いました。実際にはおそろしく厳しい世界で、おおいなる勘違いでした。なんとかなると考えていた過去の自分を鼻で笑ってしまうくらいに。

ただ、おおいなる勘違いのお陰で無謀な挑戦に臨み続けることができ、職業は漫画家、と言えるくらいまでには至りました。このまま続けていれば、いずれヒット作を産み出すことも可能ではないかと、あらたな勘違いを持つほどに。しかしある病気を患ってしまい、ハードな仕事はできない体となってしまいました。漫画ほどハードな仕事は世にないんじゃないかと思っています。ゆえに、私は漫画家の看板を下ろさざるをえない状況になりました。一人暮らしをすることすら困難となるようになり、僕は実家に戻ってきました。

(卓話にて) 漫画家を名乗る人は大勢いますが、かなり貧富の差が激しいのが実情です。プロを名乗れるのは、志望者何百人に数人、そのうち人並みの生活をできるのはさらに少なく、けれどもみな懸命に頑張っています。ドラマ「ゲゲゲの女房」のおかげまで漫画家がどれだけ過酷な仕事なのかはある程度、世に知られるようになったと思います。昔も今も大変さはまったく変わりありません。それでもみな、切磋琢磨して頑張っています。好きだからやるんだと思います。連日の徹夜などは当然なので

・石岡琉衣として

もの作りどころか普通の仕事すらできなくなりました。やりたい仕事ができない、から、やれる仕事がない、という状態までに転落です。横になっている時間が長く、この体でできることは、もはやキーボードをカタカタ打つくらいしかない、と思いました。漫画はお話と絵で構成されています。絵を描くのは無理だけど、話ならまだ考えられるはず。こうして私は小説を書き始めました。

結果、応募した作品がある小説の新人賞を受賞し、今年、デビュー作となる単行本『白馬に乗られた王子様』を刊行するに至りました。いい歳して三度目のスタートラインへ逆戻りです。が、これしかもうできないことがないので、やれる限りのことをやる所存です。せっかく地元に戻ってきているのだから、地元を舞台とした物語を作るのが今現在の一つの目標です。

(卓話にて) 漫画から小説へと舞台は変わりましたが、創作活動という意味では同じだと思っています。体力の続く限り、書き続けていきたいと思います。

「白馬に乗られた王子様」石岡琉衣 著 (2011年 産業編集センター：出版)

